

つな 未来へ継ぐ、人と歴史・世界へ鉾山再び

～先人の汗と結晶を磨き 愛あふれるまちに～



時を駆ける銀の馬車道 — 鉾山に生きた人々 —

3月4日(日)、生野鉾山開坑1200年事業の一つとして作家の玉岡かおる氏を講師に迎え、「時を駆ける銀の馬車道—鉾山に生きた人々—」と題した講演会が開催され、約200人が聴講しました。

玉岡氏は女性誌「婦人之友」に近代化の波を受ける生野鉾山を舞台に、文学をこころざす明治の女の半生を描いた「銀のみち一条」を連載されたことから、生野のまちへの思いや取材で得た想像力を掻き立てる生野のまちの魅力を語られました。

心のふるさと生野

小説執筆の際、ひかげつつじ(へいくろう花)のことを書いた時、多くの人から投書が寄せられ、全国に生野を心のふるさとにしている人が多くおられることに驚かされたエピソードを話されました。

想像力を掻き立てる生野のまち

「人間には時を駆ける力がある。タイムマシンは生まれながらに備わっている。想像力を働かせて聴いて欲しい」と前置きをした後、生野鉾山が開坑した807年頃に暮らした日本人の豊かな感受性。ものの哀れを理解する日本人の文化。銀の値打ちが確立していない頃、銀と米と交換していたこと。当時の生野には銀にまつわる産業が成り立っていたこと。明治維新で鉾山が国の直轄となり、貧困に苦しむ農民一揆の標的にされたことなど、逸話を交えながら時代背景をもとに想像力で楽しむ生野鉾山の時空を越えたドラマを語られました。

人・物が流れる銀の馬車道

「世界遺産の熊野古道は庶民が歩いてつくった巡礼の道、心の道。一方銀の馬車道は人や物が流れる物流の道である。これが今後この道をどう生かすかを考えるときに軸になる。銀の馬車道は人や物が流れるようにしないと財産として残らない」と指摘されました。



馬車道

時を駆ける

講演会の最後には「生野には事あるごとに人が集まるパワーがある。古いものを見出す新しい体験が出来る場所。時を駆けるとはそういうこと。タイムマシンの尺度は自由。想像力を使わないと生野の魅力は見えてこないし、伝えられない。生野の応援団の会員番号第1番として応援したい」とエールを贈られました。



銀谷のひなまつり

3月1日(木)から4日(日)まで、生野町口銀谷で「銀谷のひな祭り」が開催され、生野まちづくり工房井筒屋を中心に古民家や商店等約90か所に雛人形が飾られました。

このひな祭りは、生野まちづくり工房井筒屋運営委員会と、いくの銀谷工房が主催し、今年が4回目の開催になります。

期間中は町中に飾られたたくさんのひな人形が訪れた人の目を引いていました。

生野・景観まちづくりシンポジウム

3月3日(土)、口銀谷の町並みをつくる会が主催して、「第8回生野・景観シンポジウム」が開催され、約70人が参加しました。

第1部では朝来市出身の映像作家、藤原次郎氏の作品を上映。但馬に多く残る日本の原風景は海外で関心が高いことが報告されました。

「但馬の町並み・まちづくり大集合!」と題した第2部では但馬各地で活動している5つのまちづくり団体の代表等が集まり、それぞれの団体の取り組みを紹介しました。

市内からは竹田地区まちづくり推進協議会の代表石原紘正氏が城下町の特長を生かしたまちづくりを紹介。みどころを紹介した散策マップづくりの取り組みなどが話されました。また、口銀谷の町並みをつくる会会長今井常雄氏からはまちづくりの拠点施設、まちづくり工房井筒屋の運営や様々なイベントについて説明されました。

特別ゲスト八甫谷邦明氏(季刊まちづくり編集長)からは、まちづくりは住民のつながり、ネットワークが大切であることなどが話されました。

